

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷四十三第

行發日一月四年七和昭

論叢

動的資本と課税 法學博士 神戸 正雄
 社會理念とイデオロギイ及びミースト 文學博士 米田 庄太郎
 マルクスに於ける精神科學的方法 經濟學博士 石川 興二

時論

上海事變を通じて見たる日支關係 經濟學博士 作田 莊一

研究

大量觀察に於ける理論と技術 經濟學士 蜷川 虎三
 國勢調査の性質に就て 經濟學士 岡崎 文規
 燒津鯉漁業に於ける船仲組織 經濟學士 岡本 清造
 アルフレッドの工業集積理論について 經濟學士 菊田 太郎

說苑

經濟學と經營學との境界線に就て 經濟學士 谷口 吉彦
 東海道濱松宿に於ける人馬遣ひ方について 經濟學士 大山 敷太郎
 デイーチエルの公債論 經濟學士 鹽見 眞澄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

説 苑

經濟學と經營學との 境界線に就て

—上田貞次郎博士の批判に答へ
且つその教を乞ふ—

谷 口 吉 彦

一 は し が き

形式的體系論と觀念的論議の餘りにも多い吾國の經營學界に向つて、更に新たな同種の問題を持ち出すことは、私の多く欲せざる所である。併し乍ら新興經營學が學問的に成立しうるためには、個人的にも社會的にも、一應の體系的基礎づけを必要とすることと言ふまでもない。個々の斷片的研究は、それ自體としては如何に價値ある研究であつても、たゞそれだけでは學問

の研究としては不十分であらう。わが學界に於ても、尙ほ暫くはこの種の論議を續けて、相互の見解の相違を明らかにし、一應の歸着點を發見せんと努むることが、全く無益であるとする域にはまだ到達してゐないと思はれる。

東京商科大學教授上田貞次郎博士は、最近の雜誌「經營經濟研究」¹⁾に於て、『商業經濟學と商業經營學及「經營經濟的交通學」と題する論文を發表せられ、經營學と經濟學に關する學問系統論を公にされたことは、右の意味に於て特に吾々の興味を惹くこと少なからざるものがある。ことに上田博士の右の論文は、その副題に「谷口吉彦君の『商業組織の特殊研究』を讀む』とある如く、拙著に對する批判に因んで、博士の抱懷せらるゝ學問體系論を展開せられ、『こゝに著者(谷口)及讀者諸君と共に再び吟味したい所の問題は、商業經濟學と商業經營學並に所謂「經營經濟的交通學」との關係である。』²⁾として、問題を提出されたものである。

私は先づ上田博士がわざわざ拙著を取りあげて之を

1) 同文館、經營經濟研究、第十三冊(昭和七年二月)

2) 同誌、p. 106

精讀せられ、それを機縁として右の一文を起稿されたる好意に對して、深く感謝の意を表せねばならぬ。學問上の見解に於て、博士の意見は私見とは可なりに相違し、從つて拙著に於ても、種々なる場合に最も多く問題としたる吾國學者の見解は、多くは上田博士のそれであり、時には博士の見解に對して甚だ率直な批判を無遠慮に放つてゐるに拘らず、これらの點に就ては何等非禮の咎を蒙らざるのみならず、却つて懇切なる種々の指教を惠まれたることは、後學指導に對する博士の熱意も窺はれて、深く感激する所である。ことに學問系統論の異同に拘らず、研究の方法と内容に就いては、拙著に對して賛意を表せられ、過分の讃辭をさへ忝うしたるは、私の全く恐縮する所である。けれども學問上の異見は、どこまでも異見である。博士の新たな批判と指教のあるに拘らず、私は不幸にして博士の提案に賛成しえない。是等の點につき、重ねて私見を明らかにして博士の新たな教を乞ふことは、後進指導に熱心なる博士の好意に對する唯一の答禮であらう

經濟學と經營學との境界線に就て

と思ふ。

二 通説と私見

經營經濟學及社會經濟學に關する私見は、二つの點に於て謂はゆる通説と異なる様に思ふ。第一に經營經濟學の通説が、上田博士の言はるゝ如く『經營内部の組織及作用¹⁾』を研究するものであるとするならば、私見は更に經營の對外活動をも經營學の研究範圍に包含するの點に於て、この種の通説と異なる。すでに上田博士も最初(一〇四頁)に認めらるゝ如く、私見に於ては經營經濟學の中心問題は、經營の對内並に對外活動にあるべきことは、拙著第一篇の各章に明らかにされてゐる。ことに商業經營にあつては、寧ろ對外活動即ち仕入および販賣が、その本質的活動であるとさへ考へる²⁾。然るに上田博士は後に至つて、『谷口君は……經營經濟學者の通説の如く、經營經濟學は一定の意思に支配されたる個々の經營の内部の組織及作用を取扱ふものであり云々³⁾』とせられ、私見をもつて、經營の對

1) 同誌 p. 106, 107.

2) 拙著、商業組織の特殊研究、第一篇、第一章、第二節および第三章、第六節

3) 前掲雜誌 p. 106

れども私見は之と異り、内部活動も外部活動も、苟くも意思的經濟活動である限りは、すべて之を經營學の對象とするものであり、その間に兩者の境界線を引かんとするものではない。對内活動と對外活動との間には『そこに一の線があることは認められるけれども、これを以つて學問の境界とする程のものでない』とせらるゝ點に於て、私は上田博士と同感である。さればこそこの境界線によらんとする説に反對して、他の點に境界線を求めんとしたのが、私の主張である。⁴⁾然るにこの點を全く無視して、十把一からげに私見と通説を批判されたのでは、私は何の得る所もない。古い眼鏡でははつきりしないから、この新しい眼鏡をかけてはどうかと言つてゐる私の提案に對して、わざ／＼その古い眼鏡をかけてみて、どうも矢張り境界線がはつきりしないとこぼしてゐられる様なものである。

私の新たに提案してゐる境界線は、例へば上田博士の常に問題とされる價格の問題と組織の問題に就て言へば、個々の商品賣買價格と一般物價平準との差別、

および個々の企業の對内並に對外的なる經營組織と社會の經濟組織との差別である。勿論各々の前者と後者との間には、相互依存の關聯は否定すべくもないけれども而かも兩者は各々別々の存在であり、その本質的差別は意思性の有無といふ形式的差別に歸着するといふのが私の主張である。この意味の境界線ならば、上田博士もまた之を認められるかどうか、之をも否定せらるゝならば、その根據はどうか、およそ是等の點については、未だ博士の全く問題とされざる所であり、而かもそれが恰かも私の最も聽かんとする要點なのである。

四 農業經濟學・工業經濟學の問題

社會經濟學の側における上田博士の問題は二つあるその第一は、『谷口君がその同じ方法を農業經濟學や工業經濟學にも適用されるだらうか』といふ點にある。問題はこゝでもかの境界線を前提として提出されてゐて、私の境界線は博士の全く問題とされない所に引か

4) 同誌、p. 108.
5) 拙著、前掲書、第一篇第一章第一節、第二章第一節第三節、第三章第六節第七節參照、
1) 同誌、p. 111.

れてゐるのであるから、茲でも議論に大きな喰違ひのあることはやむを得ない。博士の主張では『農業經濟學及工業經濟學にあつても、それ等が經營學でない限り、經營の内部に立入るべき道理はない。而かも從來農業經濟學及工業經濟學から經營の部の考察を取除き更に谷口君に従つて農産物及工産物の市場關係を商業經濟學に譲るとしたらば、そこに何が残るか』と反問されるが、茲でも博士は、對内活動は經營學、對外活動(市場關係)は經濟學といふ前提に立つてゐられる。それは私見とは似もつかぬ前提である。従つてその前提から農・工業經濟學には何も残らないことゝなつても、それは私見とは何のゆかりもない事である。農・工業經濟學がいかなる對象をいかに研究することによつて成立しうるかは、私の直接に問題とする所ではない。けれども茲では敢て問題を回避することなく私見を明らかにして博士の批判を乞ふことゝする。すでに上田博士も引用さるゝ如く、私見では『古くより行はるゝ農・工・商業の分類は、今日では必ずしも重

要でもなくまた合理的でもない』と考へる。合理的には寧ろ、社會經濟學としては生産經濟學(農・工業その他)と流通經濟學(商業)とに分つべく、經營經濟學としても生産經營學と流通經營學とに分つべきであらう。勿論生産經濟學が更に農・工その他に分れ、生産經營學が同様に再分さるべきこと言ふまでもない。而して生産企業たると流通(商業)企業たるとを問はず、經營の研究にあつては對内活動・對外活動の何れをも包含するものとする。然らば問題は社會經濟學としての生産經濟學は、如何なる研究對象を特有するかにある。

茲でもまた社會經濟學一般に關する私見の規定に従つて、それは個々の生産企業の對内および對外活動の社會的綜合の結果として現はれ來る社會經濟現象を研究對象とするものとする。一二の例をあげる。わが國の米の相對的生產力例へば一反歩當り全國平均收穫高は、歴史的・地理的に種々の變遷または相違を示しつゝあるものと想像せらるゝが、その嚴密なる様態・原

2) 同誌、著、p. III.
3) 同誌、著、p. 110.—111.
4) 同誌、著、前掲書、p. 13.

因・結果の如きは、農業經營の對内活動でも對外活動でもない。彼等の生産經營の社會的綜合の結果に外ならぬ。また米の總産額中、自作によるものと小作によるもの、大農によるものと小農によるもの等々の比率は、如何なる様態と原因と結果に於て時間的・場所的に變化し發展しつゝあるかの如き問題も同様である。また近時問題となりつゝある立地論に就て見るも、農業の各企業は、たゞ營利的衝動に驅られて有利なる立地を決定しつゝあるに拘らず、それら立地の社會的綜合の結果は、例へばフォン、チューネンの孤立國におけるが如く、一定の社會經濟的原則を發見せしめうるであらう。同じ立地論にしても、個々の企業の經營活動としての立地決定行爲を問題とする時は、例へばアルフレッド、ウエーバーの立地論となるであらう。以上はたゞ思ひ付きたる一二の例に過ぎない。この方向に考へを進めるならば問題と内容は寧ろ多きに苦しむ程であらう。そこには残されたる問題がないのではない。實は滿蒙の曠野の様に、未墾の處女地が殆んど

經濟學と經營學との境界線に就て

着手されずに残されてゐるのである。

五 價格の問題

上田博士の謂はゆる價格の問題には、私見に於ては二種の問題が含まれる。一は經營の對外活動に伴つて起る價格即ち仕入價格または販賣價格の問題であり、之は個々の企業の經濟活動に關する問題であるから、言ふまでもなく經營學上の價格問題である。二はかくの如き仕入價格または販賣價格の社會的綜合の結果として成立する所の種々の相場、之は社會經濟學の問題に屬する。わが國に用ひらるゝこの『相場』なる言葉は比較的によく私の意味する社會現象としての價格または價格現象を言ひ現はしてゐる。それは必ずしも個々の現實の仕入または販賣價格とは一致するものではないが、而かも社會的に嚴然として存在する事實である。『相場』は小賣相場・卸賣相場・取引所相場・生産地相場等々の如く、多くの階段に於て存在し、更にこれらの標準となる相場、言はゞ相場の相場なるものが現存

する。米價が騰貴したといふ場合の米價とは何かを反省すれば、このことは明らかであらう。この後のものが經濟原論または農業經濟學の問題であり、前の各種の『相場』が商業經濟學の問題となる。それは商品の社會的流通の階段に照應する價格現象であるからである。以上が拙著に展開されてゐる私見の主要である¹⁾。ところで上田博士の之に對する批判はどうか『谷口君があれ程克明に價格の問題を取扱はれながら、價格變動の原理に立入られないのは如何なる次第であるか。實際同君の取扱はれた價格問題は、商品集散の各階段における市場の組織、相場の立て方、前後の市場における相場の相互關係等、商業組織論に附隨した問題であつて、所謂米價問題ではない。世間の所謂米價問題即ち米の需給によつて生ずる相場變動の状態は考察の範圍外におかれてある。これはドイツの商業經濟學の傳統であるから、谷口君もその傳統に従はれたことと思ふのである云々。』

第一に右の『價格變動の原理』が一般米價變動の原理

といふ意味ならば、之を取扱はないのは、前述私見の必然の結果として、私の意識的に意圖せる所である。また若しそれが各階段の相場變動の原理といふ意味ならば、拙著のうち少くとも七ヶ章³⁾は特にこの研究のために充てられてゐる。上田博士とは異なる意味に於て拙著は『商業組織の特殊研究』であるから、商業組織に關聯する限りの價格問題を取扱ふことは、當然の要求と考へたからである。

第二に、所謂米價問題として喧しい今日の問題は、上田博士の解せらるゝが如き『米の需給によつて生ずる相場變動の状態』といふ理論問題ではなく、米價を如何に調節すべきかといふ政策問題であると私は見た。之を拙著に取扱はない理由はすでに序文中に次の如く述べられてゐる。『今日わが國の問題となりつゝある農村問題・米價問題その他の政策的問題は、理論的研究を中心とする本書の性質上、たゞ問題の所在を指摘し對策の方向を暗示するに止めた部分が多い⁴⁾』と。

第三に、私の商業經濟學はドイツの商業經濟學の傳統

- 1) 拙著、前掲書第一篇第三章第七節、第二篇第五章第六章、第三篇第一章第二章第三章第四章、第四篇第三章第四章參照。
- 2) 前掲雜誌 P. 112.
- 3) 拙著、前掲書 第二篇第五章第六章、第三篇第二章第三章第四章、第四篇第三章第四章。
- 4) 拙著、前掲書序文 P. 3.

に従はれたとは、如何なる典據によらるか、寡聞なる私の知る範圍では、Boright, Grunzel, Hirsch等の各教授に於ては加何なる意味においても價格論は取扱はれてゐない。之は博士自身も認めらるゝ所であり、而も他方に拙著においては『克明に價格の問題を取扱』つてゐると認められるではないか。私は寧ろ私の商業經濟學が、最近アメリカに發展しつゝあるMarketing論に近いとの批評をおそれたものである。勿論この批評にも全く抗議を差控へるわけには行かないが。

六 組織論と價格論

こゝで上田博士の結論に移らう。博士は言はれる、『以上述べ來りたる考察の結果として、私はこの結論を得たと思ふ。即ち第一には通常社會經濟學と經營經濟學との境界として認めらるゝ所の線、即ち經營の内部と外部との區劃又は意思性の有無による區劃は、それによつて學問の境界を作らねばならぬ程に重要なものでないといふこと、第二はもし經濟學を二分するな

らば、寧ろ組織論と價格論の間に存する境界線に従ふべきではないかといふことこれである¹⁾。而して『國民經濟學は流通現象即ち價格の變動を論じ、經營經濟學は組織の經濟性即ち費用の多少を論ずるものとする』と。

第一の結論に對しては既に論ずる所で盡きる。こゝでも明らかなことは、博士が『經營の内部と外部』といふことゝ『意思性の有無』といふことゝを同視される。われは商人の仕入または販賣をも、彼れの意思活動であると見るが、博士にあつてはそれらは無意思現象であるらしい。そして『内部活動を外部活動から分離することは不自然である』との理由によつて、この境界線は『餘りに薄い境界線ではないか』と主張さるゝ點には同感であるが、さて『意思性の有無』といふ境界線には何等言及されてゐない。これは恐らくこの二つを同視される博士としては當然なのであらう。第二の結論に對しては、多くの問題が残つてゐると思はれる。之に就ては他の機會に詳論をゆづることゝ

1) p. 114.
2) p. 117.
3) p. 106.
4) p. 108.

するが、こゝではたゞ拙著に出てゐる範圍に於て要點を摘記すれば、第一に、組織を解して活動とは切り離れた固定的な體とのみ見ることはどうか、私見では經營組織とは『統一的活動の體系または統一的體系の下にある活動そのもの』を意味する。従つてそれは經營活動の結果であり原因であると共に、また活動そのものである。第二に従つて今日では組織は價格に於て活動し、『組織の經濟性即ち費用の多少は』價格を除外しては論ぜられない。それ故に第三に組織論は價格論を包含せねばならず、價格論は組織論に觸れねばならず兩者の間には、博士の主張さるゝが如き『太く遅しき線が引ける』かどうか問題である。それよりも企業の經營組織と社會の經濟組織との間、商人の販賣價格と一般物價平準との間の境界線は、より明瞭ではないか、第四に假りに博士の境界線を認めたとしても、國民經濟學として價格論、經營經濟學として組織論といふことは、更に大きな困難に逢着するのでないか、例へば資本主義經濟組織の發展法則といふが如き問題

が、經營經濟學の問題となるからである。

七 『誤解』の問題

最後に以上の諸問題とは直接の關係もないが、『誤解』問題につき一言を許されたい。言ふまでもなく私は學問的研究における自戒の一として、常に他説を出來うる限り正解せんことを努めつゝある。ところで上田博士の右の批判の中には、博士の主張に對する私の誤解として、二つまで指摘されてゐる。之は私としては全く意外であり、少なからず驚かされたことである。よしそれが如何に些細な事柄であらうとも、苟も他人の説を誤解して怡然たるが如きは、學問の研究に於ては許さるべきでない。それは少くとも私にとつては重大な問題であると考へたからである。たゞ幸にもまた當然にも、私が博士の説を問題とした場合には、常にその著書と出所とを明示しておいた。従つてその個所を點検することによつて、誤解か正解かは、何人にも明瞭にされうる状態にある。私は安んじて第三者

の批判に委せうるものであるが、たゞ博士に對する禮を失せざらんがため、最後に一言を許されたいと思ふ。

第一の點は、『同君(谷口)が他の場所で、私(上田博士)をもつて商業を狹義に解するものと見られた(一四頁)のは誤解である』といふ點に關する。こゝに狹義の商業とは、製造業者の販賣を商業から除外して、單なる商品賣買のみをもつて商業となすことを意味する。

ところで上田博士を狹義說となす私の根據は、拙著に指摘してゐる通り、博士著『商工經營』四七—五五頁にある。この數頁を一讀するならば、博士が果して廣狹何れを探らるゝかは、極めて明瞭であると思ふ。例へば博士は次の如く明瞭に言はれる『……そして商業は單純なる賣買即ち所有權移轉の手續をなすに止まることゝなつた。即ち今日の商人は商品の形狀、性質、位置等を變ずることなきは勿論、殆んどその取扱ふ所の商品を見ることさへなく、唯電信と書類のみを用ひて賣買取引を行ふことが多いのである』³⁾と。之は『商業

經濟學と經營學との境界線に就て

の社會的機能』を論ぜらるゝ最初の二頁にある。私はこの説を信じて、博士をもつて私見と同じく狹義說を探らるゝものと解したのである。それが誤解であるか正解であるかは第三者の批判にまつの外ない。

第二の點は、『谷口君は同君の主觀說の仲間に私(上田博士)を數へられ私が「研究の立場」といつたのを利害關係の意味に取られたやうであるが(四一—四三頁)それは誤解である』と主張される點である。こゝで主觀說とは、研究對象の區別を認めず、研究の態度または立場の相違によつて經營學と經濟學とを區別せんとする説を意味する。⁵⁾

ところで上田博士を主觀說とする私の根據は、拙著にも指摘してゐる通り、博士著『商工經營』二五—二六頁にある。そこには次の如く明言されてゐる。『そこで經營經濟學者の或者は、斯學と國民經濟との相異點を、研究の對象に置かずして、研究の立場即ち認識の方面に置かんとする。……つまり兩者共に人類の經濟生活を対象とするに於て差異なけれどもその對象の觀方

第三十四號

七六七

第四號 一四三

1) 同誌、P. III.
2) 拙著、前掲書、P. 14. 註。
3) 上田博士著、商工經營(商學全集 V) P. 47.
4) 前掲書、P. 117.
5) 拙著、前掲書 P. 40.

が違ふといふのである。……この説は前記の通説に比して遙かに確實なる根據を有するものであり、吾人の少くとも共鳴し得る所のものである。⁶⁾この一文を信じて、秋は博士をもつて、『對象による區別を認めず研究者の態度または立場の相違による區別をのみ認めんとする主觀説をとる學者』の中に入れたのであるが、それが誤解であるとすれば、博士自身は恐らく右の主觀説に對して、『遙かに確實なる根據を有する』ものでもなく、『共鳴しうる所のもの』でもないと考へて居られるのであらう。けれどもそれは博士の所説のどこにも現はれてゐず、現はれてゐる所は却つて之と反對なのである。

これに關聯する他の問題は、上田博士が『谷口君は……私(上田博士)が「研究の立場」といつたのを利害關係の意味に取られたやうであるが(四一—四三頁)それは誤解である。』と主張さるゝ點にある。この點に關する拙著の見解は次の如くであつた。『まことに研究態度の相違もしくは立場の相違または見地の相違とは、

社會科學の研究において好んで用ひらるゝ所ではあるが、然らば謂ふ所の態度・立場または見地の相違とは何か、全體の立場と個々の立場とは何處に實質的の相違を認めうるか、この點が更に進んで追究されねばならぬ。然るにこれらの學者の多くにおいて、個別經濟の見地または全體の見地とは、結局するところ個別經濟の利害または全體の利害に外ならぬことを發見する。その最も端的な表現としてわれ／＼はすでに之を Beniano 教授の『全體利益の立場』および『個々の企業家の私的利益の立場』において見た。わが上田教授においてはそれは『最高の利潤』と『その社會的影響(社會的利害)』との區別となつて現はれる……ここに利益または利害判斷とは必ずしも金錢的利潤に限らない。従つて最近に Nisch 教授によつて試みられつゝある經濟性による營利性の置換が假りに成功したとしても、問題は同様に残る……』⁹⁾

ここに上田博士をかくの如く解した根據は、拙著にも指摘しておいた通り、博士の論文における次の部分

6) 上田博士著、商工經營 p. 25—26.
 7) 拙著、前掲書、p. 40.
 8) 前掲雜誌、p. 117.
 9) 拙著、前掲書、p. 42.

である。』……然るに此等の研究を爲すに際して余は終に重要な問題に逢着した。それは私經濟上の利潤の多少を考ふるに止むべきか、又は企業者の最高の利潤を獲る爲めにする所の行爲が、社會に及す所の影響をも考ふべきかといふことである。例へば……トラス

トの價格政策に就いて考へても、如何なる政策が最高の利潤を生ずるかといふ私經濟の問題を考へた後、直ちに其社會的影響を考ふべきや否や。若し社會的影響は全く切離して別に考ふるを可とするならば私經濟學は成立するけれども、此の如き考へ方を不利とするならば、私經濟學は不必要といはねばならぬ。余は此の如き場合に屢々遭遇して結局私經濟學不必要説に歸したのである。¹⁰⁾』

この一文はまことに學者としての博士の一面を躍如たらしむるものであり、われ／＼後學を戒むること少なからざるものであるが、それとは別に、博士がこゝで意味さるゝ私經濟學とは、『企業者の最高の利潤』を獲んとする立場であり、國民經濟學とはその最高利潤

經濟學と經營學との境界線に就て

の社會的影響を考ふるの立場であること明らかであらう。この社會的影響が、道德的影響でも宗教的影響でもなく、經濟的影響即ち利害關係であることは、もと／＼それが國民經濟學の問題であることから言ふまでもないことである。

以上の諸點は併し乍ら何れも私の誤解であると博士自身の言はれるより見れば、或は少くとも博士の現在の見解は右と異なるものであらう。けれどもわれ／＼は博士が如何なる見解をいだかれるかは、一に博士の發表せらるゝ所によるの外ない。私はたゞ私の誤解が、決して根據なき誤解にあらざること明らかにすることによつて、私の責は免がれうるものと思ふ。

上田博士の學問と人格に對して、衷心の尊敬と親しみを有するに拘らず、或は却つてその爲めにか、措辭甚だしく非禮の點なきかをおそれる。一に博士の寛大なる宥恕を希ふ次第である。

附記 この小文は、本來は上田博士の發表されたる雑誌『經濟學研究』に載すべきものであらうが、これまで隔月に發行されてゐた同誌は、今後年二回の發行となり、從

10) 上田博士 商業學に就いて(國民經濟雜誌 XXXVIII, 1. 大正十四年一月、21—22)

東海道濱松宿における人馬遣ひ方について

つて次號は九月にならねば發行されないこととなつたから、餘りに時日の遠ざかるを恐れてこの誌上を借りることとしたものである。(七、三、五)

追記 本文稿了の後、高岡高等商業學校教授向井梅次氏は同校雜誌『研究論集』第四卷第三號に『市場組織論最近の四論著』なる一文を公にせられ、その中に拙著『商業組織の特殊研究』に對する詳細なる紹介及論評を惠まれたことを知つた。同氏の好意を深謝する次第である。文中私見に對する中西教授の批判に言及せられ、『著者の斯る批評に對する駁論を聽くべきの期も亦あるべきを想ふ』と述べられてゐるが、中西教授に對する駁論は、すでに教授の批評のありし直後に之を果し、之に對する中西教授の答辯は、殆んど一年後の今日いまだ之を聽き得ざる所である。然るに私の駁論の後、約半年を経て公にされた中西教授の著書『經營經濟學』には、教授の前の論文が、そのまま著書の一部として採録せられ、從つて私見に對する批判も全くもとのまゝに再生産せられてゐるのみならず、私の駁論に就ては何等の言及もされてゐない。かくの如き事情のために、前記向井氏の如き駁論の請求も出るわけであるから、この事を一言する次第である。

(七、三、二二三)